「対 屋」考

中世的対屋成立序論

THE MEANING OF THE "TAINOYA"

Studies on the Tainoya in the medieval times

藤田 勝也*

Masaya FUJITA

The purpose of this paper is to clarify the meaning of the "Tainoya" in the aristocratic residences. By this study, I tried to indicate the various aspects of the building called "Tainoya" from the 12th century until the 13th century.

The treatise is organized in the following manner :

Introduction

Chap.1 A case of the "Tainoya" used as the word having the same meaning as the Tai in the Heian period.

Chap.2 A case of the "Tainoya" used as the word having the same meaning as the Tai after the Kamakura period.

Chap.3 Various aspects of the aristocratic residences from the 12th century until the 13th century, in regard to the word "Tainoya"

Conclusion

Keywords : *Tainoya, tai, aristocratic-residences*

対屋, 対, 貴族住宅

はじめに

平安時代の貴族住宅における対屋とは、寝殿の脇に配される副屋のことであり、その建築形式の基本は寝殿と同様、身舎とその四周に巡らされた庇から構成されるものである。ところが、中世以降の対屋は、概して女房局や諸雑務のための施設であって、桁行方向に細長い形態の建物である¹⁾。一般的には同じように対屋と呼ばれながら、両者は機能的にも、また形態的にも、全く対照的な建物なのである。そこでいま、便宜上、前者を「古代的对屋」、後者を「中世的对屋」と呼称することにする。

ところで、古代末・中世初頭の貴族住宅においては、奥向きの私的居住空間が様々に生成・展開したところに、顕著な歴史的特質の一端を見出すことができる²⁾。とするならば中世的对屋成立の過程も、そうした現象の一つとして注目すべきものであって、その実態が解明されねばならない³⁾。またこれに関連して、中世的对屋が古代的对屋と大きく相違する点はその内容だけではない

ことも看過してはならない。次の如き事実が存するのである。それは呼称の差異であって、すなわち、中世的对屋が史料に記される時、単に「対」とあるのではなく、「対屋」のように「屋」を付している場合が古代的对屋に比して著しく多い、ということである⁴⁾。中世的对屋の成立と「対屋」という呼称。両者に何か関連性があるのではないか。この事実はそうした推測を喚起するものである。

それでは、その「対屋」という語が如何なる語意を有したのか。実はこの点については、当該期住宅史の豊富な研究蓄積にもかかわらず全く不明瞭である。従来の研究において、それはきわめて曖昧に定義・使用されてきた。このことは、「対屋」と「屋」を付さない「対」（あるいは「対代」「対代廊」）との相違・関連を甚だ不明確にしていることに端的にあらわれている。すなわち管見によれば、両者についておよそ次の3通りの語釈がなされてきたといえる。1)「対屋」を「対」の正式名称とす

本稿は、「貴族住宅における棟割長屋形式の屋舎に関する一考察——「対屋」の語意変化をめぐって——」（平成2年度『日本建築学会近畿支部研究報告集』）を全面的に修正・加筆したものである。

* 豊橋技術科学大学工学部建設工学系 助手・工博

Research Associate, Dept. of Regional Planning, Faculty of Engineering, Toyohashi Univ. of Technology, Dr. Eng.

る。2)「対」の中で規模・形式の整った建物を特に「対屋」と呼称する。3) 両者をただ漠然と同一のもののようにみなす。——という具合に⁵⁾、両者における語意の相違・関連について統一した見解は未だ示されていないのが実状なのである。両者を建築史用語としてどのように定義付けるかはともかく、それらの語意の相違・関連は明らかにされねばならないだろう⁶⁾。

そこで本稿では、中世的対屋の成立に注目する観点から、それと特に深く関わる「対屋」について、その語意の再検討を「対」との比較において行う。もって、転換期における対屋の様相について論じたいと考える。なお、「対屋」という語が古代において史料に記されることはきわめて少なく、したがって本稿も試論の域を出るものではないことを、最初に断っておきたい。

1. 古代的対屋としての「対屋」

「対屋」の事例は、11世紀以前には管見の限り確認できない。史料にあらわれるのは12世紀も後半以降である⁷⁾。本節では、その中で古代的対屋を指す「対屋」の事例について考察する。

「対屋」の最初期の事例は、古代末、『玉葉』治承2年(1178)4月26日条に、

向閤白第、【中御門南、烏丸東、松殿是也、以西為礼、無対屋、】(但し【 】内は割注を示す。以下同様の記法をとる。)とあるものである。閤白基房の邸宅松殿は4分の1町規模の邸宅で⁸⁾、「無対屋」であったという。ここにいう「対屋」が特に寝殿東西のそれを意味していることは、『山槐記』治承3年(1179)11月18日条の次の一節に示される。それは翌年、反平氏政策をとった基房が清盛のクーデターによって太宰権帥に左遷された時の状況を記すもので、

令出松殿給之間、見物雑人乱入殿中、在北対縁女房一昨日大略退出云々、毎事如夢、

とあり、「無対屋」であった松殿に北対は存在したことがわかる。このことは当時の北対の性格を示唆する点で興味深い、ともあれこの記事から、先の『玉葉』での「対屋」は東西のそれを意味していたことになるのであって、「無対屋」とは、寝殿東西脇に対が存在しなかった、ということなのである。さらに、「無対屋」の前に「以西為礼」とあることに留意するならば、「西を礼とするのにもかかわらず、寝殿の西脇にたつべき儀式空間たる「対屋」が無い」という言外の意味を読み取ることは容易であろう。この「対屋」は、寝殿の特に西脇、ハレ面にたつ対を意味しているのである。

次の『玉葉』文治3年(1187)正月1日条に見える「対屋」も同種の事例である。

事訖婦入有齒固事、【女房陪膳也、予寝殿西面副奥敷縹端置一枚、其上敷錦端龍鬘、其上施唐錦茵、為姫君座、其北間

敷高麗置一枚、其上施東京錦茵、不敷地鋪、為女房座、依所狭、余座在南庇打出傍、只敷高麗置一枚也、対屋儲客亭之時、寝殿帳前、儲此座也、其儀、中央間儲姫君座、但縹端敷二枚、其東西儲女房及余座、皆南面也、】予侍男共取居齒堅之具、事訖又侍等撤之、先例也、

文治2年(1186)4月に修造・移徙のあった兼実の邸、冷泉万里小路第において歯固の儀が行われた。「対屋」の存する邸で、そこに「客亭」を設ける時には、兼実・女房・姫君の座は全て寝殿南面に配置するところだが、この邸には「対屋」が無かったため、「依所狭、余座在南庇打出傍、」と記されるような狭い寝殿西面であっても、そこに座が配置されたのである。実際、同邸には寝殿東西に対も対代も対代廊も確認されないのであるが⁹⁾、ここでは特に儀式会場となる東西いずれかハレ面の対が存しなかったことを記しているのである。

このようなハレ面の対を意味する「対屋」の用例は、中世以降においても確認できる。『玉葉』安貞3年(1229)7月26日条に以下のような記述がある。

次令改二棟南装束、【行事職事但馬守兼康、諸司官人等役也、】其儀西二棟南庇及公卿座、御簾垂之、敷満長筵於広庇、…(中略)…件装束事、東三条儀設東対南弘庇、【或南庇、】無対屋之家、或設寝殿注之、文治二年、第二度表如此、二棟南方有広庇之所、或又設此所、【建久二年復辟表、大炊殿儀如此、】今度二棟南面有広庇、仍用此儀、次之家司職事等帰来、申付省之由、入夜大内記遠章持来勅答草、

閤白道家の初度上表における勅答使対面が西二棟廊の南広庇で行われた。これは特にそこを儀場としたことに関して説明した一節である。すなわち、東三条殿では東対の南弘(広)庇や南庇を用いたが、「無対屋之家」では寝殿や、さらには二棟廊の南面が広庇の場合にはそこを儀場とする先例もあったとし、今回はその先例通り二棟廊南面を用いたというのである。

撰閤家の儀式会場として重要な機能を果たした東三条殿が、彼らの儀式遂行の際の規範として常に意識されていたことを¹⁰⁾、この事例においても確認することができる。しかしだからといって、ここで「無対屋之家」とあるのを、東三条殿東対の如き規模・形式の整備された対が存在しない家、と即断するのは誤りであろう。東三条殿東対のような対を有することが確かに理想的ではあろうが、たとえ対代(あるいは対代廊)であっても儀式遂行に支障はなかったはずだからである¹¹⁾。「無対屋之家」では寝殿や二棟廊を代替屋として用いるというのであるから、「無対屋之家」とは、東三条殿の東対のような対が無い家のことではなく、寝殿の東・西いずれかハレ面に対も対代(あるいは対代廊)も存在しないような家、を意味するものと推察される。このことは、もし「無対屋之家」でなく「屋」を除いて「無対之家」と記されていたとしても、そこにおける「対」が対代や対代廊を含むものと考えられるのと同様のことであろう¹²⁾。この「対

屋」のない邸宅を確定することは残念ながらできないが、この邸では、寝殿の東西脇に対は存在しなかった。すなわち、ここにいう「対屋」もまた、儀式の場として記されるようなハレ面の対全般を意味しているのである¹³⁾。

以上、事例考察した「対屋」はハレ面の対全般を示す呼称として使用されていた。このように「対屋」という語が特定の規模・形式のものを限定して指示する語でないことは、それが具体的な建物を指して使用される次の事例によって一層明確となる。

高陽院は元久2年(1205)12月に新造、後鳥羽院の移徙があった。ここでは造営当初の高陽院における東対に注目する。摂政家実の院拝賀を記す『摂関詔宣下類聚』建永元年(1206)3月22日条¹⁴⁾に、

於東中門内、以院司右中弁光親朝臣、令申御慶賀給、…(中略)…昇自中門外大床、経殿上々戸参御前給、【心殿(観力)為御祈壇所、仍出対屋有御前召、】

とあり、高陽院の東対が「対屋」と記されていることを知る。この対は、例えば土御門天皇の朝覲行幸を記す『明月記』承元元年(1207)正月2日条に、

次入御、安御興於中門、…(中略)…如例入御東対代、とある通り、実際は東対代であった。高陽院はその東対代も含めて3年余後に改修される。その時の状況について『三長記』承元3年(1209)12月10日条¹⁵⁾に以下のようにある。

此御所初御移徙之時、被定雑事了、今度非新造、引出寝殿於南、東対屋加庇、少々被造加舎屋也、不可及定歟如何、改修は全くの新造というのではなく、寝殿を南へ引き出したり東対代に庇を加えたり、あるいは舎屋を増築するというものであった。それはともかく、やはりこの時も東対代のことを「東対屋」と呼称している。実際は東対代であったのに、「東対屋」と記しているのである。もっとも、東対代なのだから、本来なら「東対代屋」と記されるべきであろう。ただ、対代や対代廊でも、「代」や「代廊」が省略されて史料の中では単に「…対」と記されることは間々ある。同様に、「対代屋」の「代」が省かれて「対屋」と記されることもあり得た、ということなのだろう。いずれにせよ、「対屋」が対代を意味することもあったわけである。

さて、庇が付加されて後、改修翌年の同じく朝覲行幸の様子を記す『長兼卿記』承元4年(1210)12月23日条¹⁶⁾に、

入中門妻戸、経同廊・東対屋西弘庇等、入御自二棟廊南面、【中央間、簾外拳灯二本、】以東対南庇為公卿座、

とあり、『実宣卿記』同日条¹⁷⁾でも、

公卿列立門外、入御、経東対屋西弘庇入御、自二棟南面妻戸、

とあり、またそこが春華門院御所となっていたことを示す記事、『玉葉』承元4年(1210)正月1日条にも、

参春華門院御方也、【東対屋、】

とある。このように、改修後のものを改修前と同様に「東対屋」と記す場合のあったことがわかる。『長兼卿記』で西弘庇や南庇の存在が明らかとなり、南弘庇の存在も確認されることから¹⁸⁾、改修後は身舎の周囲に庇を巡らし、さらに南と西に弘庇を設けるという大規模な殿舎になったものと推測される。承元3年(1209)の改修に際して増築された庇の詳細は知り得ない。しかし少なくとも改修前後でその規模・形式を大きく変化させたことは疑いない。同院は西洞院大路西・大炊御門大路北・油小路東・中御門大路南の東西1町南北2町を占め、西洞院大路に面する東側を主にハレ面とする邸宅であった¹⁹⁾。改修によってハレ面の対としてふさわしい形式に整備されたものと考えられるのである。

このように高陽院における「対屋」の語法について見ると、先の諸事例と同様、「対屋」がハレ面のそれを意味することの他に、さらに、それが対代を意味する場合もあったことや規模の変化に関わらず一貫して「対屋」と呼称されていたことから、「対屋」という語はその規模・形式に関係なく使用される呼称であることが明らかとなるのである。

2. 中世的対屋としての「対屋」

『玉葉』元暦2年(1185)2月26日条中に、以下のような「対屋」が確認される。

此日、上北対屋仮棟、依為吉日也、大将居所四壁不全、世間狼藉之間有恐、仍欲同宿此宅之处、屋少程狭、不能同居、仍立加雑屋一両、可居一所之故、尋日次之处、今日雖为天燭日、元慶被立大極殿為最吉例、又此外有吉例等、仍不可憚之由、在宣所申也、仍今日上之、

これは世情不安から大将良通夫妻が父兼実の九条の邸に同居することになったことを示すもので、翌月7日に造立、同11日に造作を終えて引越している²⁰⁾。兼実邸は「屋少程狭、不能同居」だったため、新たに北対をたてることで九条邸での良通夫妻居住の便を計ったわけである。ここで、その北対のことを「北対屋」と呼称していることがわかる。その実態は明らかにできないが、「雑屋」とも記していることや、当時の北対の様相から²¹⁾、中世的対屋に類する建物と推測することが可能である²²⁾。とすればこの事例は、「対屋」が古代的対屋の呼称として史料にあらわれる時期に、早くもそれが中世的対屋を意味する場合もあったことを示していて注目されるのである。

やはり古代末に、中世的対屋と目される事例が存する。『玉葉』文治4年(1188)7月1日条の次の文言に注目したい。

定長又仰云、可被修造六条殿、可造進西对者、申云、承候了、更不可煩申、但合期之勤不可叶、聊可被延引敷、…(中略)…定長朝臣為御使又来云、御所伊予国所課事、改対屋、可宛

南面築垣一町【門二字之内、棟門一字、築垣之下門一字、】
之由有仰、

この時期、六条西洞院殿は後白河院御所とすべく改築準備にあった。院の仰せを伝える定長の言として、そこに造営予定の西対を、兼実は「対屋」とも記しているのである。竣工した同邸は、西洞院大路に面する東側をハレ面としていた²³⁾。したがって、この対はケ面の対だったことになる。完成した西対については、『山丞記』文治4年(1188)12月19日条²⁴⁾に「西対六間最舜法眼、六間道清法眼、」とあり、また『吉大記』同日条²⁵⁾に「西対向間【飛驒、藤中納言沙汰、】／間別置白襲、具裳唐衣、女房何時可着哉、／同対向間【但馬、範能朝臣沙汰、】／間別置白襲衣・濃袴、無物具等、」(但し引用文中の／は改行を示す)とある。桁行都合12間にも及ぶ細長い建物だったのである。その建築形態は紛れもなく中世的対屋であろう²⁶⁾。もっとも、当初、西対の造営沙汰を院より受けた時、それがケ面にたち、かかる形式の建物であることを兼実が(あるいは定長が)認識していたとの確証はない。

13世紀以降、「対屋」は古代的对屋とともに中世的対屋を意味する呼称としても広く使用されるようになる。次の事例をその代表例として示そう。

鎌倉初期、正治2年(1200)2月再建の近衛殿²⁷⁾に、兼経と道家女仁子の新居が経営された。その状況を記す『高嗣記』(『玉葉』所収)嘉禎3年(1237)正月14日条に以下のようにある。

当御所有六ヶ間対屋、【卯酉妻、】西第一間為女房車寄、出几帳帷儲屏風、但無打板量、剋限可引出壺祢中疊云々、件六ヶ間皆為女房壺祢、各上口敷高麗端帖、下口敷紫帖、【下口同懸御簾、有鈎丸、又屋儲如常、】釣黒染棹、置泥絵火櫃炭取等、立灯台置椀手洗、但東一間為刀自例所、敷紫帖置火櫃炭取、又立棚置菓子、当御所東、又有六間対屋、【子午妻、】雜具等如対、但東戸一間為下台所、敷紫帖釣白木棹、当北対東有三間贊殿、

これによれば、「対屋」と記される建物は御所(寢殿に擬された三間四面卯酉屋)の北と東に2棟存する。前者は桁行6間、東西棟の「対屋」で、女房局にあてられており、桁行柱間1間ごとを区切って6個の個室を設けるという棟割長屋の形式で、各々の個室は上下に二分されている。また後者は桁行6間、南北棟の「対屋」で、雑具などで内部が舗設され、一部は下台所など勝手廻りにあてられている。同邸は室町小路に面する西方をハレとする邸宅構成であって、北対の東方に贊殿が存することに示される通り、東と北にケの施設が配置されていた。すなわち、これらの「対屋」はケ面になって奥向きの機能を担う建物だったのである。両者とも、その機能・形態ならびにその位置から、中世的対屋であることがわかって²⁸⁾。

3. 「対屋」にみる貴族住宅の様相

僅かな事例ながら、前節まで貴族住宅にあらわれる「対屋」の語意を再検討してきた。その考察結果を要約すると以下になるだろう。

- (1) 「対屋」が史料にあらわれるのは主に12世紀後半以降である²⁹⁾。
- (2) 「対屋」は、古代的对屋と中世的対屋という、その内容において全く対照的な建物の呼称として、同時期に使用されている。
- (3) 古代的对屋としての「対屋」は、ハレ面の対を意味する場合が多い。
- (4) 古代的对屋としての「対屋」は、ある特定の規模・形式を有する対を特に意味する呼称ではない。

以上の諸点から、冒頭で列記した、「対屋」についての従来の語釈はいずれも的確なものではないことがわかって³⁰⁾。

さて、かかる特徴は、平安末・鎌倉初頭の貴族住宅における対屋の諸相を如実に示しているようである。

まずその一つは、対の変容に関するものである。当時は、ケ面の対は縮小あるいは消滅へと向かう時代であった。しかも時代を越えて、特に儀式遂行に絶えず意を注いでいた貴族は、その会場となるべきハレ面の空間を重視し常に意識していたはずである。さらに彼等の記録はその式次第の筆記にとりわけ力が注がれたものであった。とすれば、古代的对屋としての「対屋」がハレ面のそれを指す傾向にあったという(3)の事実は、当該期の貴族住宅の様相、ひいては当時の社会のそれをそのまま反映するものであったと考えられよう。

そして、さらに注目すべきことは、中世的対屋の成立に関するものである。12世紀末は対が変容しつつあった、いわば過渡期と考えられる。かかる時期に「対屋」という呼称はあらわれた——(1)。だからこそ、それは当初から古代的对屋と中世的対屋という、全く対照的な性格の建物の両方を示す呼称となり得た——(2)。すなわち、(1)と(2)は、表裏一体の関係にあって、それらはともに、中世的対屋成立へと向かう、対の新たな展開を示唆するものである。

さらに推し進めて、「対屋」という語の登場と中世的対屋成立との間に因果関係を見出すことには、なお慎重でなければならない。しかしながら、中世以降、古代的对屋が次第に消滅し、代わって中世的対屋があらわれること、その一方で「対屋」が史料に散見され、しかもそれが専ら中世的対屋として使用されていくこと、かかる現象は紛れもない事実である。このことは中近世の故実書に説かれる「対屋」を見れば明らかであろう。そこには<「対屋」=中世的対屋>なる概念の成立を鮮明に見ることができる³¹⁾。語としての「対屋」の登場とその普及は、転換期貴族住宅における中世的対屋の成立ならび

にその展開と、時期を同じくしていたのである。

おわりに

「対屋」という語は平安時代を通じて普及していた呼称である、といった大なる誤謬が、おそらく冒頭で列記したような語釈上の混乱を招いたのであろう。それには、初めて「寝殿造」の名称を使用し、その概念規定を行った『家屋雑考』（沢田名垂著、天保13年（1842））³²⁾が、「対屋」に関して3)の語釈であったことも、あるいは大きく影響しているのかもしれない。しかし本稿で検証したように、それは、12世紀後半という、貴族住宅が新たな、しかも大きな変容の過程にあった時期から広く浸透した呼称であって、貴族住宅の歴史全体から見れば比較的新しい語ともいえる。「対屋」が事実上、その呼称の定着を果たすのは、中世以降であって、しかもそれは、主に中世的対屋としてなのである。

また、「対屋」という語の普及時期は古代から中世への転換期にあったため、それは当初、古代的対屋と中世的対屋の両方を指す呼称として使用された。「対屋」に内包されたかかる性格は、当該期における前者から後者への変容といった、対の変容過程に関しての安易な図式を導く危険性を孕むものである。しかし私見によれば、両者は別系統の建物とみなすべきである。貴族住宅において、奥向きの空間として展開した中世的対屋。その成立には、ハレ向きではなく、一貫して奥向き空間での独自の変容の過程があったからである。その考察については別稿33)に譲り、ひとまず本稿を終えることとする。

註

- 1) 川上 貢『日本中世住宅の研究』、昭和42年10月。なお、中世住宅における対屋全般に関して、本稿は同書に拠るところが大きい。
- 2) 拙稿「萱御所について」(『日本建築学会計画系論文報告集』382号、pp.130~137、昭和62年12月)、同「小寝殿について」(『建築史学』10号、pp.21~41、昭和63年3月)、同「北対考」(『日本建築学会計画系論文報告集』408号、pp.145~156、平成2年2月)。
- 3) それに関しては、拙稿「雑考——中世的対屋成立試論——」(『日本建築学会計画系論文報告集』423号、pp.79~89、平成3年5月)。
- 4) もっとも、中世的対屋の全てが史料の中で必ず「対屋」と記されているわけではない。一邸宅内に複数棟存在する場合に「一対・二対」としたり、その規模に応じて例えば「十間対」と呼称する、あるいは寝殿北方に存することから単に「北対」と記すこともあった(註1前掲書)。しかし、中世的対屋を呼称する時に、「対屋」という語が頻繁に使用されたこともまた事実であって、そのことによって「対屋」はその語意の定着を果たしたともいえるのである。
- 5) 例えば『建築大辞典』(昭和51年3月)の「たいのや〔対屋〕」の項に「略して「対」ともいう」とあり、『日本国

語大辞典』巻6(昭和49年9月)の「たい〔対〕」の項に「〔たいのや(対屋)〕の略」とあるのは1)の例。また、川本重雄「対屋考」(『日本建築学会計画系論文報告集』384号、pp.108~118、昭和63年2月)で、「梁行二間の母屋に四面庇・南弘庇・寝殿と反対側の孫庇を備えた対」を「対屋」として論述されているのは2)の語釈によるものであろう。一方、3)は寝殿造の解説一般に見られ(例えば『日本大百科全書』12巻(昭和61年11月)や『世界大百科事典』16巻(昭和56年4月)などの「寝殿造」の項)、寝殿造関係の研究論文の叙述上でも散見される語釈である。文学作品を概観してみると、『伊勢物語』第4段に見える東五条宮の「西の対」は、阪倉篤義ほか校注『日本古典文学大系』9(昭和32年10月)の頭注に「西の対の屋」とあり、片桐洋一編『鑑賞 日本古典文学』5(昭和50年11月)でも「西の対の屋」と口語訳される。また、『枕草子』に見える大進生昌家の「ひんがしの対」は、田中重太郎校注『日本古典全書』(昭和22年6月)の頭注に「東の対の屋」、池田亀鑑ほか校注『日本古典文学大系』19(昭和33年9月)の頭注には「対(対の屋)」と記され、石田稷二編『鑑賞 日本古典文学』8(昭和50年12月)では「東の対の屋」、松尾 聰ほか校注・訳『日本古典文学全集』11(昭和49年4月)でも「東の対の屋」と口語訳されている。このように原文は「対」でも「対の屋」と訳されることが多いのである。これらは1)あるいは3)の語釈に基づくものであろう。

- 6) 「対」が時に「台」とも記されることなども含めて、「対」自身の語意についても考察する必要があるだろう。今後の課題としたい。
- 7) 『日本紀略』天徳4年(960)11月4日条、同貞元元年(976)6月19日条に、それぞれ、冷泉院の「東南対屋」、閑院の「西対屋」が確認される。また、『江次第抄』第2、大臣家大饗の項(『続々群書類従』第6法政部 所収)中に忠平時代の東三条殿について「東三条第貞信公家也、在町東(西カ)二条南、件第寝殿東西各有対屋、東西中門廊各属対也、寝殿与対之間有透渡殿、寝殿東西腋并東対西面西対東面及南面各有階、」と記される。いずれも古代的対屋としての「対屋」で10世紀に遡る事例だが、『日本紀略』は平安末期の編年史料、また『江次第抄』もその成立時期は中世に属し、10世紀における語としての「対屋」の存在を直接示すものではない。
- 8) 『玉葉』承安3年(1173)12月16日条。
- 9) 『玉葉』文治2年(1186)10月17日条、同29日条、文治3年(1187)正月3日条他。なお同邸については、太田静六「摂政九条兼実の諸邸」(『寝殿造の研究』、昭和62年2月 所収)がある。
- 10) 例えば『玉葉』文治2年(1186)7月27日、10月29日各条、同3年(1187)正月1日条など。
- 11) 東三条殿の東対のような、儀式空間として整備された大規模な対でなくても、上表の場となることはあった。例えば関白師通の上表が二条殿で行われた時、同邸には寝殿が存在したが、勅答使対面の場となったのは寝殿ではなく東小寝殿であった(『中右記』嘉保元年(1094)12月13日、永長元年(1096)9月15日各条)。この東小寝殿は「東対代」とも呼称されている如く(『中右記』永長元年(1096)正月3日条)、東対に準じた扱いを受ける殿舎であったが、東三条殿の東対のような、儀式空間とし

て整備された大規模な対では無論なかったのである。なお、小寝殿の詳細については註2前掲拙稿「小寝殿について」。また、本文引用の『玉葉』に「文治二年、第二度表如此、」とあるのは、8月9日の摂政兼実の第二度上表のことで、先の冷泉万里小路殿がその舞台と考えられ、同じく割注に「建久二年復辟表、大炊殿儀如此、」とあるのも同じ摂政兼実の第二度上表で、この時は大炊御門北富小路西殿で行われている。両邸とも対（対代・対代廊）の存在は確認できない。そうした事例は、例えば摂政基房の上表が五条坊門南高倉東の少将泰通第で行なわれた時にも見られ、対（対代・対代廊）が存在しなかったため、この時は寝殿がその場となっている（『兵範記』仁安2年（1167）5月28日条）。

- 12) 例えば『玉葉』承安2年（1172）正月2日条に「摂政家臨時客也、【于時被座錦小路大宮第、件家、前太相国之領也、新加修造、所被献也、以西為礼、無対并透廊等、】」とあるのは、摂政基房の錦小路大宮第に対も対代も対代廊も存在しなかったことを示すものである。実際、当日の臨時客は寝殿を舞台に行なわれていて、それらの存在を確認することはできない。
- 13) 『京都東山御文庫記録（貞応元年階忠記）』（『大日本史料』第5編之1 所収）貞応元年（1222）8月13日条に、「仍令申九条殿給之处、平相国之時、以寝殿設公卿座、已下准之、花山院ハ有対屋家也、難准余所之上、不限太政大臣、任大臣不儲嬰之儀是多、被准彼例尤可定也、其儀即今度儀也、仍被准用了、」とあるのも同様の事例であろう。公経の大臣大嬖に際し、御所装束に不審を抱いた階忠に対して九条道家が答えた一節である。平相国（清盛）の邸宅（六波羅殿）では寝殿に公卿座を設けた。花山院には対屋が存在したが、余所がそれに準じることは難しく、対屋のない邸宅であった平相国の例に準じるのが妥当である、という。確かに花山院のハレ面に存した西対も東三条殿東対と同様、大規模な対であったが（太田註9）前掲書）、「花山院ハ有対屋家也」とある「対屋」は、そうした対を特に想定しているわけではなく、ハレ面の対全般を意味するものと解される。
- 14) 『大日本史料』第4編之8 所収。
- 15) 『大日本史料』第4編之10 所収。
- 16) 註15に同じ。
- 17) 註15に同じ。
- 18) 『中都記』（註15前掲書 所収）承元3年（1209）12月20日条、『玉葉』承久2年（1220）11月5日条。
- 19) 太田静六「後鳥羽上皇の院宮」（註9前掲書 所収）。
- 20) 『玉葉』元暦2年（1185）3月7日、11日各条。
- 21) 註2前掲拙稿「北対考」。
- 22) この事例に関しては、註3前掲拙稿を参照。
- 23) 『吉御記』（『親王御元服部類記』所収、『大日本史料』第4編之3 所収）建久2年（1191）12月16日条他。
- 24) 『仙洞御移徙部類記 五』（『図書寮叢刊 仙洞御移徙部類記 上』、平成2年3月）所収。
- 25) 註24に同じ。
- 26) 太田静六「後白河法皇の仙洞御所・六条西洞院第」（註9前掲書 所収）では「母屋と西庇とからなる対代廊形式で、全長が八間ほど」と推定されている。
- 27) 近衛殿については、註1前掲書。
- 28) 『百鍊抄』寛元2年（1244）9月1日条に「中宮旬御膳以

平盤供之。為御輕服。【依入道相国事也。】又春宮御同宿也。至于三日可為御神事。仍其間中宮可有入御対屋。無屋御座儀。平盤且有先例之由。大夫示之。」とあるところの後嵯峨天皇中宮大宮院の御所を、嘉禎再建の今出川殿とすれば、同邸に東西対は存在しなかったことから（註1前掲書）、この「対屋」も中世的対屋であろうか。なお、中世初期の住宅である鎌倉將軍御所にも「対屋」の存在は確認できるが、その詳細は概して明らかではない。「対屋」は『吾妻鏡』建久2年（1191）7月28日条（建久度大倉御所）、同承久2年（1220）正月11日条（承久度大倉亭内御所）、そして同寛喜2年（1230）3月16日条（嘉祿度宇都宮辻子御所）に見え（御所名は吉田高子「鎌倉將軍御所について その構成と変遷」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』（昭和55年9月）に拠る）、太田静六「鎌倉幕府の將軍家御所を中心とする規模の考察」（註9前掲書所収）では、宇都宮辻子御所のそれが「対十間被立之。」とも記され、また「御所西対【十二ケ間也。】被造加二ケ間。十四ケ間有憚否。」（同寛喜2年（1230）3月18日、29日各条）とあることや他時期の事例などから西対代廊と推測されている。しかし、その「対十間」と「西対【十二ケ間也。】」には11日間の時間差があり規模も異にしている。同定する根拠は薄いものと私考される。ただ、たとえそれが「対屋」であったにしても、当初の10間から短期間に「二ケ間」ずつ増築されて14間になったことは、それが切妻屋根だったことを推察せしめるものであり、しかも桁行に細長い建物だったのであって、古代的対屋とはその形態を異にしていたことになる。また將軍御所における対屋の性格に関しては、『とはずがたり』巻4（次田香澄訳注『とはずがたり（下）』、昭和62年8月）に「ただ今御所を出で給ふといふをみれば、いとあやしげなる張興を対の屋のつまへ寄す。」とあるのが参考となる。これは7代將軍惟康親王が京へ配流される時の、鎌倉御所における出立の様子を描写する場面で、「対の屋のつま」というのが、御所主人である將軍の出立すべき場所にはふさわしくないものとして描かれていることに注目されよう。

- 29) 「対屋」に関連するものとしての「対代屋」は、12世紀初頭より確認される。それらの事例を史料にあらわれる年紀順に見ていくと、まず『殿暦』長治元年（1104）4月11日条に「今日中宮遷御堀河殿、…（中略）…下御後余着公卿座、【東対代屋、北上対座、】」とあるように、中宮篤子の堀河殿遷御に際して公卿座の鋪設されたのは「東対代屋」であったことがわかる。『中右記』同日条に「東対代廊」と記される如く、その実態は対代廊であった。次に、同じ『殿暦』永久5年（1117）9月21日条に、「今日法務權僧正行尊慶来、其儀西対代屋母屋二數量、【高麗、北面、其上茵ヲ敷為僧正座、自南第三間余座敷門座、南面、北一間也、】」とある。これは当時忠実の邸だったと考えられる鴨院に（『殿暦』同年7月2日条）僧行尊の慶賀を迎えたことを示すもので、「西対代屋」がその場となっている。この「西対代屋」は他日条では単に「対代」あるいは「西対代」と記されている（『殿暦』同年6月25日、7月17日各条）。さらに『重方記』（『法住寺殿御移徙部類記』（『図書寮叢刊 仙洞御移徙部類記 上』、平成2年3月）所収）永暦2年（1161）4月13日条に、応保創建の法住寺南殿について「以寝殿為院御所、当日以吉時立御帳、

其儀如恒，所敷之外不敷他疊，以西二棟廊為宮屋御座，以西対代屋為同襲御所，」とある中に「西対代屋」と記されるのも西対代のことである。さらにまた、もと藤原邦綱邸で当時摂政基通の邸となっていた五条南東洞院西第について、『山槐記』元暦元年（1184）8月24日条に「参五条亭，…（中略）…寝殿及東二棟廊懸新簾，【寝殿不出几帳，去年以後北政所不坐之故，大二棟廊東四ケ間巻，南面北障子垂之，東為壁，無対代屋，】」とある中の「無対代屋」とは，この邸に「対代」（ハレ面にたつべき）が存在しなかったことを記すものであろう。こうした「対代屋」の事例は中世にはいっても確認される。『明月記』嘉禄2年（1226）7月29日条に，三条南西洞院西に所在した左大臣邸の，邸東面の一部を描いた指図が収められ，「東対代屋云々」と表記されている。同指図からは北側部分が不明で，建物の全体規模・形式は明確にし得ないが，「東対代屋」は母屋梁行2間で桁行は4間以上，東西南に庇，南にはさらに弘庇を付けた平面と推定される。母屋中に公卿座が舗設されていることは対の新たな機能の展開を示すものとして興味深い，母屋・庇から構成される古代的対屋の形式であることに変わりはない。たとえ「東対代」と表記されても何等不都合のない建物なのである。また，正元元年（1259）再建の五条北大宮西殿でも，同様のものと考えられる「東対代屋」の存在が確認される（註1前掲書）。なお以上の事例は，堀河殿の「東対代屋」以外は全て邸宅のハレ面にたつ建物である。

- 30) 1) は，(1) によって否定される。すなわち，古くから「対」という語があり，その後，「対屋」があらわれるのであって，「対屋」を「対」の正称とする根拠は乏しい。2) は，「対屋」が特定の規模・形式をもった対を特に指すのではないという(4) によって，一概にはいえないことがわ

かる。実際，東三条殿東対・花山院西対・閑院東対あるいは堀河殿西対といった，規模・形式の整った対が，他の邸宅の対に比べて特に「対屋」と呼称される傾向にあった，というような事実はないのである。そして3) は，主に12世紀以降については首肯できようが，それを11世紀以前にもあてはめることはできないのである。

- 31) 例えば『海人藻芥』（応永27年（1420）成立，『群書類従』巻492 所収）に，「対屋作」の説明として「軒八十間廿間ナリトモ妻ハ三間也。」と説かれ，また『貞丈雑記』（天保14年（1843）成立，島田勇雄校注『東洋文庫453』，昭和61年2月）の巻之14「家作の部」の中，「一の台・二の対の事」の項に「女中部屋をばすべて「対の屋」と云うなり。」とある。これら故実書の筆者が，対屋を専ら中世的対屋として理解していることがわかつた。それが「対屋」の正確な理解を示すものでないことは，本稿の考察に明らかであるが，古代的対屋の存在を等閑視してきたのは，時代による「対屋」の頻出度の差に起因するものとすれば，そのような解釈もまた無理からぬものともいえよう。なお，『古事類苑』居処部8（家作2）には，「東対」「西対」「北対」などと共に「対屋」の項があり，14の事例が挙げられている。ここでも引用史料の中で単に「…対」とある場合と「…対屋」と表記される場合を混同して扱っているが，その内で史料に「対屋」と記されているのは9例である。それらの全てが中近世の故実書からの引用であるところに，そうした状況が如実に示されている。
- 32) 『新訂増補 故実叢書』25巻，昭和26年8月。
- 33) 註3前掲拙稿。

（1990年12月10日原稿受理，1991年5月1日採用決定）